

小林隆児
東海大学大学院健康科学研究科教授

関係発達臨床からみた 自閉症とことば

はじめに

これまで自閉症のことばの問題については、多くの知見が集積されてきたが、その大半はわれわれの言語発達を基本に据えて、その比較からどのような遅れや歪みが認められるかを評価判定することによって捉えられたものであった。たしかに、われわれのことばの用い方や捉え方からすると、自閉症児の話し方には少なからず違和感を覚えるかもしれない。自閉症を初めとする発達障害の本質を理解するためには、発達そのものがどのように展開するのか、とりわけ言語認知という精神機能がどのような精神発達過程でもって獲得されていくのか、その過程をつまびらかにしていくことがなにより求められる。

そこで本稿では筆者の依って立つ関係発達臨床の立場から、自閉症のことばとその背景

にあるものを素描してみることにしよう。

自閉症にみられる対人回避的傾向

(事例) A男・その1

まだ発語はなく、歩くことができない。精神運動発達遅滞をともなった一歳八カ月の自閉症の幼児である。A男は母子ユニット(Mother-Infant Unit: MIU)で、床にころがっているたくさんのボールを手で扱い、ボールが動くさまを見つめながら追いかけることに夢中である。周囲の大人の存在にはまったくといっていいほど関心を示さない。動きが止まった時に母親が煩ざりしようと近寄ると、A男は顔を背け母親に背中を向けてしまふ、ふたたびボールに夢中になって動き回っている。

MIUでの関係支援が始まってしばらくは、そんな自閉的行動が目立っていたが、少しずつ周囲の大人の存在に関心を向けてくるようになった頃である。女性援助者がA男に背を向けて床に座っていると、背中を彼女に向けながら、おもむろに、後ずさりするようにして近づいてきた。こちらに関心を向けて相手をしてもらいたいのかなと気づいた彼女は、すぐに方向を変えて彼の前まで回って相手をしようとした。すると、A男はすぐさま反対方向に回転して彼女に背を向けてしまった。A男は少しずつ他者への関心を示し始めてはいたが、いまだ対人接近には非常に過敏で回避的傾向が非常に強いのが特徴であった。

自閉症に必ずと言っていいほど認められる

対人回避傾向が顕著であったある幼児自閉症の一例にみられたエピソードである。筆者らの臨床の場であるMIUではこのような乳幼児期にみられる母子関係の成立に困難さをもつ事例への介入や関係支援の試みを積み重ねてきたが、子どもと母親のあいだの関係障害の問題として捉えていくことよって、言語認知発達についても新たな視点から捉えることができるように思う。

A男とわれわれとの対象へのかかわり方の相違を示すひとつのエピソードからみてみよう。

ある対象への関心の向け方にみられる母子双方のずれ

(事例) A男・その2

支援開始直後のあるセッションで、A男はいはいしながら、MIUに置いてあった「パンチング・ドル」(おきあがりこぼし)のそばに寄っていった。そばで付き合っていた母親は相手をしようとして、それを思わず手で何度か押しして左右に揺らした。するとA男はひどく怒り、手でそれを押さえてじつと「パンチング・ドル」の裏面を眺めていた。そこには注意書きの文字とマークが記されていたが、A男はそれに魅入っていた。

母親が「パンチング・ドル」を思わず手で押しして揺らしたのは、常識的に見て自然な振る舞いであったといつてよい。その玩具はまさにそのように用いることを意図して作られたものであるからだ。しかし、A男のその物へのかかわり方、着目の仕方は母親とは明らかに異なっていた。彼にとつて、その時のそれは「パンチング・ドル」という玩具ではなく、記された文字やマークそのものだったといつてよい。

自閉症児の対象に対する着目の仕方

(事例) A男・その3

同じ頃、A男はことあるごとに天井をしばし見上げ、床に座りながら自己回転運動を繰り返していた。こんな時には、われわれがいかに関わろうとしても近寄りがたいものを感じさせていた。母子ユニットに手洗い場(図1)が設置されていた。その床は防水加工が施されていたが、思い出したかのように時折、A男はその床に額をくっつけるようにしてじつと眺めていた(図2)。

その時じつと魅入っていたA男の前に広がっていた世界は、図1のようなものではな



図1 母子ユニットにある手洗い場の床

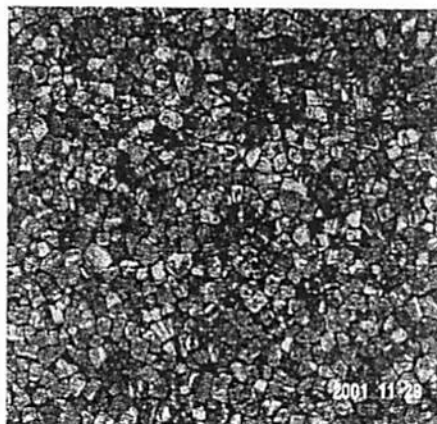


図2 手洗い場の床を接写した世界

く、図2のように一見規則的で繰り返し模様のように見えるながらも、よくよく見ると微妙に大ききの異なった石がぎっしりと配列された世界であった。なるほどこのような世界ならば魅入ってしまうかもしれないと思わせるものがある。

このように、ある対象に対する関心や興味の向け方がわれわれと子どもとのあいだですれてしまうことはけつして珍しいことではなく、ほとんどの場合このようなずれを日々蓄積しながら、日常生活が営まれていく。ここに自閉症の言語認知の問題の核心的な部分が潜んでいると筆者には思えるのである。

母子コミュニケーションの ずれに関するエピソード

(事例) J男・その1

J男に筆者が最初に会ったのは彼が三歳四カ月の時であった。些細な変化にも敏感に反応してパニックを起こす男児で、当時、話しことばはいまだ見られなかった。母親は優しく、熱心にMIUに通っていた。母親はとても受容的であったが、どこか自信なげなところがあつた。

支援開始からおよそ七ヶ月経過したころのあるセッションでの一場面である。J男と母

親とのあいだで緊張が持続しているために、母親と遊びながらもJ男には回避的な傾向が統いていた。しかし、J男の行動全体に甘えたような、なよなよとした身体の動きが感じられた。J男は箱の中にあつたいろんな玩具の中から「ガラガラ」を取り出して、本来手で握るほうの枝の先を口にくわえようとした。すると母親はすぐさまその「ガラガラ」を取って、上下を逆さにして枝のほうを持ちながら手で振って見せて、「ガラガラだね」とJ男に語りかけた。するとJ男はすぐに他のことに興味を移してしまった。

この時、母親はJ男がガラガラを口にくわえるのを見て、汚いからと思わず止めさせたかったにちがいない。しかし、当時J男は明らかに甘えが強まっていて、なにかにつけてそのような素振りを見せていた。そんな彼の気持ちがこのような行動に駆り立てたのである。ところが、両者の気持ちの違いが、このような母子コミュニケーションのずれを生むことにつながっていることに気づかされる。ここではJ男は「ガラガラ」(と一般に言われている対象)を、振って音を鳴らすものとして扱ってはいなかったが、母親はまさにそのように扱う対象であることを子どもに思わずやっ

て見せた。そんなずれによってJ男は回避的行動に走ってしまったと思われるのである。筆者はここでの母親の対応を非難して述べているのではない。われわれが子どもに接する時には、大なり小なり必ずわれわれ自身の価値観に基づいた対応をしているのであつて、そのことは至極当然のことである。J男の母親のみに限ったことではなく、われわれ自身の問題でもあるのだ。しかし、そのことを「当然のこととして」われわれが自閉症児にかかわることによって、このようなコミュニケーションのずれが生まれ、自閉症児は対人回避的傾向を強めていく。そのことが彼らとの関係をさらに困難なものにしているという実態にわれわれは気づく必要があるのだ。なぜならそのような気づきなくしては、自閉症児との関係づくりは困難であると思われるからである。

さて、これまでのいくつかの具体的なエピソードにて示されていることは、ある対象が何であるかを理解すること(あるいは認識すること)にまつわる問題の所在がどこにあるかをわれわれに教えてくれているように思う。それは何かといえ、子どもとわれわれとのあいだで起こりやすいコミュニケーションのずれがどのようにして生まれるかということである。

ことばにかかわる問題とは、対象の認識のあり方そのものを意味していると思われるからである。

対象の意味はどのように規定されるか

われわれは通常ある対象を捉える際に、一義的なものを捉え方してしまいがちである。「ガラガラ」を前にしたら、これはガラガラだね、「パンチング・ドル」を前にしたら、これはパンチング・ドルだね、などと。そのことが問題だと言おうとしているのではなく、身の回りがあるさまざまな対象は、このようになんらかの意図をもって作られたものであるか、あるいは扱う人がなんらかの意図をもってかかわることによって、そこで初めて一義的に規定される。われわれは互いにそのような共通認識のもとに日常生活を送っているからこそ、日々の生活を円滑に送ることができている。通常はこのようなことを意識することはほとんどないが、われわれはある対象を「○○である」と認識する際には、暗黙のうちに対象を他の人々と同じように捉えるということを体験的に身につけているものである。このことは共同主観ともいわれるものであるが、共同体の中で相互に共通

のある気持ちや思い、または価値観を分かち合っていることを意味している。

したがって、ある一つの対象について「○○である」という共通の認識をもつためには、単にその対象が「○○である」ということばのみを覚えれば事足りるものではなく、その対象のどこにどのように着目し、どのように扱い、どのようにかわるかという体験そのものをも踏まえたものでなくてはならない。そのような体験は乳幼児期からの養育者らとの交流を通していつの間にか身につけていくものであって、そのような体験の蓄積があつて初めてことばが生きたものとして子どもにも身に付いてゆくのである。ことばにかかわる問題とは、このような共通認識がどのようにして生まれていくのかを考えることでもあるのだ。

しかし、自閉症の子どもたちはことばを獲得する際に、特別な困難さをもっている。それはけつして、単にことばの学習能力が劣るとかといった表層的な問題などではなく、ことばの獲得過程そのものに潜む問題として捉えなくてはならないものである。

先の二人の事例からもわかるように、自閉症児が一つの対象に向ける関心のあり方は、われわれのそれとはかなり異なっていることが多い。

対象と属性

一つの対象はさまざまな性質をもっている。メガネであれば、大きさ、色、形、重さ、触感、材質、用い方など。このような性質を属性というが、その対象が「メガネである」と意味づける際には、その対象に備わったいくつかの属性に着目して初めて可能になる。

逆にいえば、着目する属性が異なれば、その対象の意味は異なってくるということである。たとえば、ここに「机」があつたとしよう。いつものように椅子に座つて書き物をする際には、たしかにそれは机であるが、椅子がないので仕方なくその「机」の上に座つたならば、その時のそれはその人にとつては「椅子」であつて、「机」ということはできない。すなわち、ある対象が何を意味するかを客観的にあらかじめ規定することはできないということである。

ことばを教えることにまつわる危うさ

しかし、われわれは子どもにことばを教える際に、どうしても目の前にある対象を指し

て、これは「〇〇だよ」と教えることが一般的である。このことが学習としてまったく意味をなさないかといえば、けつしてそうではなく、子どもがわれわれと同じようにその対象のある属性に着目していれば、これは「〇〇だよ」と教えることは、その子どもにとつて本来の学習としての意味をもつ。

しかし、自閉症児の場合、このようなかわりが肯定的な意味というよりも否定的な意味をもちやすいのは、先の事例で示したような「相互のずれ」が生まれやすいからである。つまり、対象に向ける着目の仕方そのものに大きなずれが起こっている限り、われわれは子どもにその対象の認識の仕方を適切に教えることは、基本的に困難であるのだ。

関心の向け方と対象のもつ意味

では、どうしたらよいのかといえば、自閉症児の対象に向ける関心のあり方そのものがわれわれのそれと共通なものとなっていくことが必要になってくる。今日、ある対象に対して共通の関心に向けて分かち合うような関係を意味する共同注視の困難さが自閉症の基本障害として注目されているのは、対象の認識のあり方と、その対象への関心の向け方のあいだで深い関連性があるからである。

一つの対象が「〇〇である」との共通認識をもてるようになるためには、その対象への着目のあり方、かわり方そのものを共有できるような関係の成立を目指すことが求められる。そのような関係を基盤にして初めて、対象の共通認識が可能になる道が拓けるからだ。

関心を分かち合うことの困難さ

そこで問われるのは、ある対象に対して同じように関心に向け合うという関係がどのようにして生まれるのか、自閉症児とわれわれとのあいだではなぜ困難であるのかということである。

たとえば、時に療育現場でも、指導員が子どもたちにある対象（物や人物）に無理矢理に関心に向けさせようとして、子どもたちの顔をそちらに向かせるという場面さえ目にすることがある。このようにして強制的に子どもを何かに仕向けるといことが、子どもにとってどのような体験として蓄積されていくか、われわれは真摯に受け止めなくてはならないと思うが、われわれの中にある焦燥感や苛立ちなどがそのような強引な指導を引き起こしかねない。

このような指導が生まれる背景には、彼ら

とのあいだで一緒に楽しく何かをともにするという関係が容易には成立しがたいことがあるのかもしれない。たしかに彼らはわれわれとのかかわり合いを一見すると回避しているだけのように思えるが、実はそうではなく、彼らもわれわれと同じように誰か（主に養育者）にかまってももらいたい、注目してもらいたい、甘えたい、などといった他者と関係をもちたい気持ち（関係欲求）をもっている。筆者のこれまでの臨床経験からすると、例外は皆無である。

しかし、彼らは結果的には対人回避的構えをとらざるをえないところに自閉症児とのかかわり合いの難しさの起源がある。それは、彼らに生来的（とも思えるが）に見られる極度な知覚過敏である。対人接近に対して知覚過敏が強いために、どうしてもある程度以上に他者に近づく（あるいは他者が自分に近づく）と、思わず回避的な反応を引き起こされてしまう。

こうして、いつまでも自閉症児と養育者とのあいだに好ましい関係、すなわち「甘える—甘えられる」関係が生まれにくいことになる。先述のA男（その1）にその特徴をみてとることができよう。その結果、自閉症児には半永久的に安心感が生まれず、ますます周囲に対して警戒的になってしまふ。そしてそ

のことが、知覚過敏をいよいよ強くしてしま
う。

こうして、悪循環は肥大化の一途を辿る
(図3)。青年期に激しい行動障害を示す事例
の多くはその固定化した状態を示していると思
われる。

筆者らの実践している関係発達支援では、
子どもたちと養育者とのあいだに、どうすれ
ば望ましい関係、すなわち「甘えるー甘えら
れる」関係(愛着関係)が生まれるかに、精
力を注ぐ。その結果両者のあいだで望ましい
関係が生まれていくと、子どもの認識世界は
大きく展開していくことにつながっていく。

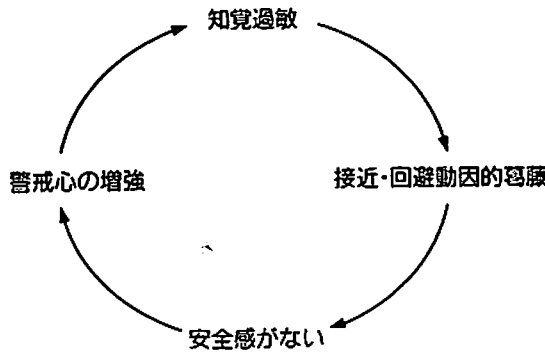


図3 知覚過敏と接近・回避動因的葛藤の悪循環

ある自閉症児と母親との 会話に関するエピソード

(事例) J男・その2

MIUでの関係支援が一年一〇ヵ月ほど経
過した頃の、J男に関するエピソードである。

最初の頃に比してはるかに母親との関係は
安定し、J男は抵抗なく母親に甘えるようにな
り、母親の語りかけることばを盛んに取り
入れるようになってきていた。そんなある日
のことであった。

母子一緒に外を歩いていると(台風一過で
その日はかなり暑かった)、ふとJ男が「サ
ムイ(寒い)」と言った。母親はこの数日と
比べても暑いと感じていたので、思わず「暑
いよね」と言い直して応答した。すると、ま
たJ男は「サムイ」と同じように繰り返して
言った。そこで母親はなぜ彼は「サムイ」と
言ったのだろうかと考えた。まもなく、J男
はビルの日陰に入った時に「サムイ」と言っ
ていることに気づき、なるほどと感心したと
いう。

この頃になると、このような母親の気づき
がよく報告されるようになっていた。母親は
J男の発することばの意図をずいぶん的確
につかむことができるようになっていた。

J男の発したことば「サムイ」は、何を意
味していたのか、しばらくして母親が気づい
たことよって、ここでの母子コミュニケーション
ションはとて心地よいものとなっていった
であろうことが想像される。このエピソード
に示されたJ男のことばの使い方は、われわ
れの常識的なことばの使い方からすると、一
見戸惑いを覚えるが、子どもの視点に立つて
考えた時、違和感を覚えるどころか、逆に子
どもらしい独特な視点でもってことばを捉え
ていることを教えられ、なるほどと感心して
しまう。

ここで大切なことは、母親がしばらく考え
てJ男の言わんとしたことばの意味内容を、
その場の状況からすぐさま察することができ
たことである。その日はたしかに暑かった
が、ビルの日陰に入るとひんやりとした涼し
さを感じさせたのであろう。そのような微妙
な気温の変化を敏感に感じとったJ男は、そ
の時に感じた体験を「サムイ」と表現したの
である。

J男と母親との関係が最初からこのように
うまくかみあっていたわけではない。母親は
その時の子どもの気持ちや不安に基
づいて行動してしまいがちなところがあっ
た。それはなぜかといえ、お互いの気持ち

の動きがつかめないような「関係の困難さ」があったからであって、けっして母親自身の捉え方が間違っていたからといった単純な理由によるのではない。そのことを端的に示しているのが、A男とわれわれとのあいだで認められたようなかわり合いの困難さなのだ。

自閉症児の視点からみた対象世界

(事例) 翔太(仮名)

この事例は拙著「自閉症の関係障害臨床」^[1]で取り上げたものであるが、その中で翔太が次第に自分の世界の意味を彼なりに取り込んでいく過程が描かれている(一四五—一四六頁)。

〈母親の日記〉(母子で)のんびり散歩ができるようになった。神社の太い木を何本も指さして「キ、キ」と言って、以前と比べゆっくりに散歩しながら目に見えた物、感じたことを私(母親)に同意を求めるようにして、確認するようになった。その頃から、翔太は机やタンスの木目を見て「キ」と言うようになった。私が何か探して見て見つかると、「あった、あった」というので、翔太も「(アツ)タ(アツ)ツタ(アツ)ツタ」と言うようになる。使い方もなかなかうまい。

翔太は以前から丸太ん棒(の木目)を眺めるのがとても好きだった。母親はそんな彼に対して、「木(だね)」と声をかけていた。突然のように彼は机やタンス(の木目)を見ながら「キ(木)」と言うようになった。その時の翔太にとっては「机」でも「タンス」でもなかったのである。彼の「いま」の世界においては「机」や「タンス」の風性のひとつである材料の「木(の木目)」に着目していた。だからそれは「机」でもなく、「タンス」でもなく、彼にとっては「木(の木目)」だったのだ。

そこに自分の関心の強い木目の特性に共通性を見出して、「キ(木)」と言いだしたのである。おそらく、翔太が以前から眺めていた丸太ん棒の木目の美しさに魅入っていたのである。その美しさと同じものを机とタンスにも発見したのである。だから彼にとって、それは、木目の美しさに魅入っていた時に母親が語りかけてくれたことば、「キ(木)」なのだ。

対象に対する距離の取り方と認識のあり方

これまでの三例のエピソードからわかるように、自閉症児の対象に対する着目の仕方には、ある共通点を見出すことができる。それは何かといえば、対象の細部に着目しやすい

ということである。われわれにとってはその対象の全体を捉えて何らかの意味あるものと認識するのに比して、彼らはその細部を捉えて対象を認識するということである。

本来、子どもは最初発育者に抱かれて甘えることによって、親密で安心できる関係が生まれていくが、自閉症児の場合、養育者にはそのような愛着行動を容易に取ることができない。それに代わって彼らは満足を与えてくれる対象として、文字、幾何学的模様、一見単純なパターンを繰り返すものなどに執着しやすい。その際の彼らがそのような対象に対してとるスタンスは、非常に密着したものとされている。対象に対する距離の取り方が彼らの対象認識のあり方を強く規定しているということである。社会性の広がりや他者に対する距離の取り方との間にも同様なことが指摘できるように思われる。対人関係と物事との認識のあり方には、どこかで深いつながりがあることが推測されるのである。

自閉症児の対象世界を分かち合うことの大切さ

これまでのいくつかのエピソードからわれわれが教えられるのは、ことばの獲得のためには、子どもの立場、子どもの視点から捉え

監修=岡崎祐士 | 青木省三 | 宮岡 等

こころの科学 110

HUMAN MIND

July 7・2003

[特別企画]

治療を終えるとき

宮岡 等・岡崎祐士・青木省三/編

I 精神疾患と治療終結

統合失調症の薬物療法の終結

福田正人・大森一郎・竹吉秀記

気分障害(躁うつ病・うつ病)における

維持療法の終結

加藤忠史

神経症性障害の抗不安薬療法の終結

渡辺直樹

パーソナリティ障害における

治療目標と治療の終結

福島 章

精神療法の終わりを謀る

宮川香織

カウンセリングの目標と終結

岡村達也

生活療法の目標と終結

小川一夫

II 治療の終結をめぐる

統合失調症の治療終結と

ソーシャルサポート

伊勢田 堯・近藤智恵子

短期精神療法における治療期間の決め方

村上雅彦

治療の終結・中断と治療者の法的責任

横藤田 誠

神経症患者の治療終結をめぐる

大矢 大

向精神薬長期服用時の副作用と治療終結

宮岡 等

治療を早く終結すべき精神病病態

岡崎祐士

一回で終わりの面接と終わりのない面接

青木省三

●巻頭に一備つけることと育むこと

青木省三

●論説

武井 明

髪とこころの不思議

●連載

鑑定医の事件簿

風祭 元

カウンセリング原論

菅野泰蔵

子どものための小さな援助論

鈴木啓嗣

心理療法と村上春樹の世界

岩宮恵子

スクリーン精神医学

高橋祥友

人はなぜ芸能に魅せられるのか

島田裕巳

臨床心理学と精神医学の対話

下山晴彦・野村俊明・島 悟

●ほんとの対話

●こころの現場から

【いじめ】(高等学校)

夏木 智

タコスのあった学食(食の風景)

吉長三恵子

学びの力の発見(学習困難児の塾より)

小笠 毅

好評発売中 1143円+税

www.nippyo.co.jp/

日本評論社

られた世界を分かち合うということの大切さである。われわれが彼らの世界に少しでも近づき、彼らからみた世界をわれわれが発見し、そこでの感動を思わずことばで表現するというかかわりが生まれるようになれば、おそらく彼らはわれわれのことば(文化)を積極的に取り入れたい気持ちになっていくと思われる。

自分が担当していたある自閉症の子ども

が、学校で毎日のように長時間水道の水をホースを使って撒き散らしていた。その教師は彼との関係を作っていくことに随分と苦労していたが、彼とことん付き合う中でやつと彼が水遊びに没頭している理由が分かったという。彼と同じ目の高さでホースから勢いよく流れ出る水を眺めていた時、水の飛び散っていった方向を見やると、目の前にきれいな虹ができていたのを発見したという。「きれいだね」とその感激を思わず言葉にした時から、彼との関係が急速に深まっていったという。

えで大切かを教えられる話である。自閉症児たちの対象世界、あるいは彼ら自身が語ることばの背景に思いをはせることが、彼らのことばを育んでいくうえでいかに大切なことがわかるであろう。

(文献)

(1) 小林隆児「自閉症の関係障害臨床―母子のあいだを治療する」ミネルヴァ書房、二〇〇〇年

(2) 小林隆児「自閉症と行動障害―関係障害臨床からの接近」岩崎学術出版社、二〇〇一年

(3) 小林隆児「自閉症の発達精神病理と治療」岩崎学術出版社、一九九九年

(こ)ばやし・りゅうじ/精神医学